

設立当初、大阪府内三三を教えた民族学級がその後、朝鮮学校の再開などにより衰退の一途をたどるなか、一九七〇年代、同和教育や朝鮮人教育、「本名を呼び名乗る」運動にかかわってきた教職員たちや教職員運動によって、あらたな民族学級が府内各地の学校に作られはじめた。現在大阪府内一〇五校、東大阪市二九校をはじめとして、府内一八〇校に設置され三〇〇〇人近い韓国・朝鮮にルーツのある子どもたちが学んでいる。

この二〇年余りのあいだに、大阪市生野区では七〇年代、小学校の四校ほどにしかなかった民族学級が今日では一六校に拡大し、設置していないのはわずか三校だけになった。それほどまでに拡がった最大の原動力は民族講師や保護者たちの力であり願ひである。そこには、かつて朝鮮人であることをひた隠しにし、社会科の時間、朝鮮というこぼがでるたびに下を向いて、ただ時間が過ぎるのを待っていた自己の姿を重ねてきた彼らの、子どもたちに同じ経験させたくはないという思いがある。その思いや願ひが行政や学校、地域を動かし今日の民族学級設置運動を支えてきたのだ。

民族学級の子どもたち

民族学級は、常勤の民族講師のいる学校ではおもに週に一度学年ごとに実施され、四〜五校をかけたもつ市費嘱託民族講師が配置されている学校では、いくつかの学年をまとめた複式学級でおこなわれていることが多い。

民族学級ではおもに民族のことばと歴史・地理

どもの声に、保護者が「そうか、それじゃやめとくか」と答え、担任もそれに「そうですか」といえば民族学級は成り立たない。それを防ぐことができるのは担任の理解と指導、保護者の支援しかない。また本名原則も大阪府では教育指針に記載されて四〇年近くたっているが、いまだ子どもたちの二割にも至っていない。同一性を求める日本社会の圧力を感じずにはいられない。

民族学級をとりまく変化

民族学級にも確実に変化の波が押し寄せている。少子化と韓国・朝鮮籍者の顕著な減少である。大阪では一〇年毎に半減し、そのスピードを増している。北鶴橋小学校では民族学級で学ぶ児童の八割が朝鮮半島にルーツをもつ日本国籍者であり、在籍者数もこの五年で一〇〇人から六〇人に減っている。

当然ウリナラ（我が国）ということばもそぐわなくなっている。子どもたちのルーツが朝鮮半島と日本列島にまたがっていることを前提に教える必要がある。しかし変化を迫られているのは民族学級だけではなく日本の学校全体である。事実さまざまなルーツをもつ日本国籍の子どもたちへの取り組みが求められている。

そのような例として、最近大阪府教育委員会は在日外国人教育の資料集『違いを認め合い共に生きるために』のDVDを作成した。これらの教材を「総合的な学習」に活用すれば人権や国際理解教育に生かすことができる。そして民族講師も総合的な学習の時間や社会科等の授業に積極的に貢献できるだろう。

多文化を
ささえる
人びと

大阪の民族学級 在日の子どもたちとともに歩んだ60年

民族学級ができて60年がたつ。

1948年、第二次世界大戦後やっと実現したばかりの朝鮮人学校が政府により閉鎖され、日本の学校に来ざるをえなかった子どもたちのため、いわば代償として作られたものである。

以降、社会の荒波にもまれながらも、民族学級は在日韓国・朝鮮人の子どもにとって今も重要な役割をはたしている。

カク チョンイ
郭 政義

北鶴橋小学校民族講師

や文化などが教えられている。子どもたちは民族学級に対してどのような思いをもっているのだろうか。昨年卒業した六年生の感想文から拾い出してみる。

〈韓国のことなんて最初はどうでもよかったけど高学年になって歴史のことハングルの事とても興味わいた〉〈民族学級七時間目はやめてほしい〉〈自分の名前を失う創氏改名、自分の名前は大切にしなくてはと思った〉

五月にある入級式、子どもたちの姿は初々しい。焼肉が楽しみなオリニ（子ども）運動会もある。七月には民族学級のプールがあり、六年生の一泊旅行もある。〈みんなでごはんを食べたり泳いだり、民族学級で一番の思い出だ〉

一月には東部子ども民族文化祭があり一二月には発表会がある。〈頑張って練習した両面太鼓、緊張した〉

一月にはウリマルイヤギ（民族語弁論）・カルタ大会に出る。〈一生けん命、発音を覚えてがんばった。これを踏み台にしていきたい〉

そして三月には修了式を迎え一年のサイクルは終わる。行事や活動を節目に子どもたちも成長していく。

一方で最大の課題は子どもたちの出席の維持と本名原則の実現である。

低学年ではチョゴリを着て「朝鮮人に生まれてよかった」といつていた子どもたちも高学年になると辞めたりする子も出てくる。塾や習い事を優先するからだ。

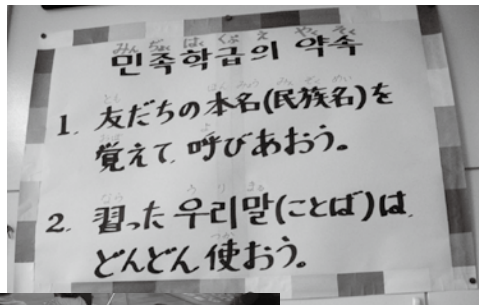
「民族学級おもしろいからやめたいねん」という子

民族学級の意味と価値

民族学級は韓国・朝鮮人のアイデンティティの確立をめざしている。「ゴミ箱にすてていた」韓国・朝鮮を拾い上げ、見つめなおし、少数者として生まれたことの価値を再発見し、「リニューアル」する取り組みでもある。そうしてはじめて他のマイノリティや新渡日者の存在が見えてくる。

子どもたちは、単に日本から朝鮮半島を、朝鮮半島から日本を視ることのできる、両者の架け橋だけでなく、自ら輝くスターになれる存在でもある。民族学級は、多民族多文化社会へ向かう今日、「ちがいの」大切さを提示できる確かな存在でもある。「想定外」の「盲腸」のような存在であった民族学級が六〇年という時代を経た今、公立学校にあらたな問題提起と可能性を示している。〈一週間たったの一時、人より得した一時、これが見える民族学級〉

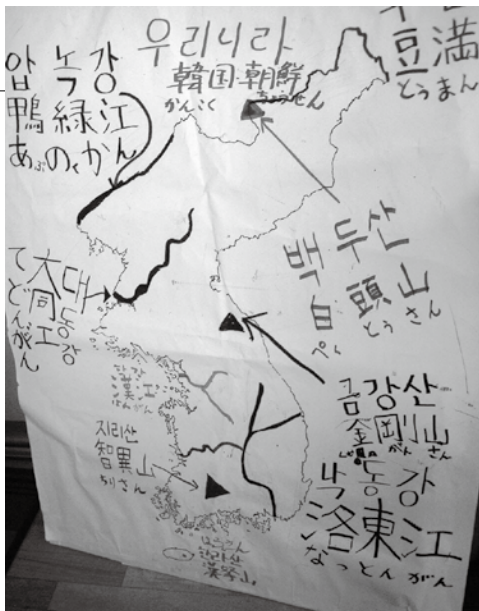
民族学級修了式を終えた6年生と保護者



民族学級の教室に掲示されているポスター



毎年3学期に開かれるウリマルイヤギ・カルタ大会の様子



民族学級入級式での朝鮮半島の紹介場面